ISSN 2189-1826

月刊ニューズレター
現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて

第83号 2021年11月15日

編集・発行『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
（編集世話人 冨岡勝・谷本宗生）
連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1
近畿大学教職教育部 冨岡研究室
e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp
HP（最新号とバックナンバーを公開中）
http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/

コラム 「情報通信技術を活用した教育の理論と方法」1単位の科目新設	冨岡 勝	2
逸話と世評で綴る女子教育史（83） －京浜工業地帯・阪神工業地帯と田園都市の創設－	神辺 靖光	8
1969年の大東文化大学での学生相談 －矢田部順吉講師が語るカウンセリング模様 －	谷本 宗生	12
学校資料の教材化を模索して㉖ －教員を対象にしたアンケート調査を事例に－	八田 友和	15
明治後期に興った女子の専門学校（38） 東京音楽学校に咲いた天才姉妹―幸田延と安藤幸	長本 裕子	20
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究に関する覚書（8）：鳥取東高等学校『柏葉』にみる専攻科（8）	吉野 剛弘	21
体験的文献紹介(31) ―明治初期 東京の私立中学校、私立外国語学校調査―	神辺 靖光	29
刊行要項（2015年6月15日現在）		34
短評・文献紹介		35
会員消息		35

コラム

「情報通信技術を活用した教育の理論と方法」1 単位の科目新設

冨岡（とみおか） 勝（まさる）
（近畿大学 ）

はじめに

このニューズレターでは、木下広次研究や尋常中学校の自治活動史研究などを主に書いているが、2020年からコロナ禍の影響を受けて、勤務先での急務について書くことが増えてきた。これはこれで、「2020年代の教育史研究者が当時の大学問題についてどのようなことを考えていたか」を記録したことになり、後年の史料にもなるのではないか、と考えて半ば開き直って書いている。

2021年後半の勤務先での懸案事項の一つとなったのは、標記の「情報通信技術を活用した教育の理論と方法」の科目新設準備であった。

2017年11月の教育職員免許法施行規則の改正によって、全国の大学で2019年度入学生を対象に新課程の教職課程がスタートした。このときに「各教科の教育法」と「教育の方法及び技術」に関する科目に「情報機器及び教材の活用を含む」の内容が盛り込まれた。勤務先の大学でも、新課程の準備のために会議を重ね、 大量の課程認定書類の作成に追われた。

新課程がスタートしてからわずか2年後の2021年8月、教育職員免許法施行規則が改正され、「教育の方法及び技術」に含まれていた「情報機器及び教材の活用を含む」を「情報通信技術を活用した教育の理論及び方法」（1単位）として拡充して2021年度入学生向けに義務付けられた。

こうして各大学の教職課程は、 法令改正から数ヶ月で新科目新設のための準備に追われることとなった。

大学の教職課程が書類作成で忙しくなったといっても、「GIGA スクール構想で小中学校での情報通信端末の一人一台が2020年度中に実施された、という状況を考えると教職課程で ICT 分野の内容を急いで拡充するのは当然だ」という声も聞こえてきそうだ。

たしかにそうかもしれない。しかし、単に「コロナ禍の影響で」「文部科学省の方針で」ということで書類作成に追われるだけでは、長期的な視野を持って教職課程をめぐる研究・教育をおこなうことは難しいだろう。そこで、この「情報通信技術を活用した教育の理論及び方法」（1単位）が、どのような理由で各大学の教職課程に求められたのか、そして課題は何かといったことを書いておきたい。

「令和の日本型学校教育」の構築を目指す中教審答申

この「情報通信技術を活用した教育の理論及び方法」新設のもとになったのは、2021年1月26日に中央教育審議会から出された答申「「令和の日本型学校教育」の構築を目指して ～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現」であった。

この答申の内容は多岐にわたるが、ごく簡単にいえば、〝従来の日本の学校教育の良さを残しながらICTを活用して「個別最適な学び」と「協働的な学び」を実現させ、2020年代における教育の発展をめざす〟という主張であるといえる。

そしてこの答申は、大学の教職課程における ICT 分野の教育について次のように述べている。

①

時代の変化に対応して求められる資質・能力として，近年では，AI やロボティクス，ビッグデータ，IoT といった技術が発展した Society5.0時代の到来による情報活用能力等が挙げられ，特に，学習履歴（スタディ・ログ）の利活用など，教師のデータリテラ

シーの向上が一層必要となってくると考えられる。時代が今後どのようなものに変わっていくのかは予測困難であるが，少なくとも考えられるのは，様々な分野で予測のできない非連続的な変化が起こっていくことであり，そうした社会に対して教師や学校は，変化に背を向けるのではなく，訪れる変化を前向きに受け止めていくことが必要である。特に，GIGA スクール構想の加速により，児童生徒「1人1台端末」の教育環境が実現することで，教師がICT を活用しながら，児童生徒の個別最適な学びと，協働的な学びを実現していくことが重要である。」

②

ICT 環境の整備は，児童生徒に対してより良い教育的効果をもたらすものであり，ICT の活用を通じた質の高い学習活動を実施するため，教師が地域の ICT 環境の整備状況等に応じて，それらを活用した指導力の向上に努めることは重要である。」

③

また，教職課程においては学生が ICT 活用指導力を体系的に身に付けていく必要があるため，各教科の指導法における ICT の活用について修得する前に，各教科に共通して修得すべき ICT 活用指導力を総論的に修得できるように新しく科目を設けることや，修得した内容を学校現場において生かすことができるよう実践の総まとめとして位置付けられている教職実践演習において模擬授業などの ICT を活用した演習を行うこと等について検討し，教職課程全体を通じて速やかな制度改正等を行うことが必要である。

④

加えて，今後，大学がこうした教師の ICT 活用指導力の充実に

向けた取組について自己点検評価を通じて自ら確認することや，国において大学の取組状況のフォローアップをすること等を通じて，大学が実践的な内容の授業を確実に実施できる仕組みを構築することが求められる。」

つまり、〝社会の変化は予測困難であるが、教師や学校は、情報活用能力が求められるという変化を前向きに受け止めるべきであり（①）、ICT を活用した質の高い教育に取り組むべきである（②）。大学の教職課程全体で、学生が ICT の活用指導力を修得できるようにすることが必要であり、そのための要として ICT の活用指導に関して総論的に学ぶ授業を開設することが必要である。また、各大学の教員養成課程での ICT 活用指導力充実の取り組みについては、自己点検評価で今後重視されるだろう〟という趣旨である。

こうした趣旨のもと、「情報通信技術を活用した教育の理論と方法」1単位は、文科省の「教職課程コアカリキュラム」で、10項目にわたる到達目標が定められている。

情報通信技術を活用した教育の理論及び方法

全体目標：　情報通信技術を活用した教育の理論及び方法では、情報通信技術を効果的に活用した学習指導や校務の推進の在り方並びに児童及び生徒に情報活用能力（情報モラルを含む。）を育成するための指導法に関する基礎的な知識・技能を身に付ける。

（1）情報通信技術の活用の意義と理論

一般目標：　情報通信技術の活用の意義と理論を理解する。

到達目標：
1）社会的背景の変化や急速な技術の発展も踏まえ、個別最適な学びと協働的な学びの実現や、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の必要性など、情報通信技術の活用の意義と在り方を理解している。
2）特別の支援を必要とする児童及び生徒に対する情報通信技術の活用の意義と活用に当たっての留意点を理解している。
3）ICT支援員などの外部人材や大学等の外部機関との連携の在り方、学校におけるICT環境の整備の在り方を理解している。

(2)情報通信技術を効果的に活用した学習指導や校務の推進

一般目標：

情報通信技術を効果的に活用した学習指導や校務の推進の在り方について理解する。

到達目標：

1）育成を目指す資質・能力や学習場面に応じた情報通信技術を効果的に活用した指導事例（デジタル教材の作成・利用を含む。）を理解し、基礎的な指導法を身に付けている。

2）学習履歴（スタディ・ログ）など教育データを活用して指導や学習評価に活用することや教育情報セキュリティの重要性について理解している。

3）遠隔・オンライン教育の意義や関連するシステムの使用法を理解している。

4）統合型校務支援システムを含む情報通信技術を効果的に活用した校務の推進について理解している。

(3)児童及び生徒に情報活用能力（情報モラルを含む。）を育成するための指導法

一般目標：

児童及び生徒に情報活用能力（情報モラルを含む。）を育成するための基礎的な指導法を身に付ける。

到達目標：

1）各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間（以下「各教科等」という。）において、横断的に育成する情報活用能力（情報モラルを含む。）について、その内容を理解している。

2）情報活用能力（情報モラルを含む。）について、各教科等の特性に応じた指導事例を理解し、基礎的な指導法を身に付けている。

3）児童に情報通信機器の基本的な操作を身に付けさせるための指導法を身に付けている。
※小学校教諭

短期間に多くのことを求められることが画一化につながらないか

上記の中教審答申や、コアカリキュラムの内容自体はそれほど間違っていないのだろう。たしかに、社会で情報通信技術が発達し、こどもたちの日常生活でもスマートフォンや SNS などが浸透している状況のなかで、学校教育において情報通信技術を活用した教育を進めることが期待されるだろうし、情報通信技術の利点と危険性を理解しながら使いこなせる力を子どもたちが身に付ける機会を公教育として保証することも必要だろう。また、「一人一台」を利用することで子どもたちの個々の状況に合わせた、従来以上にきめ細かい指導が可能になるのであれば、それに取り組むことが期待されるだろう。また、情報通信技術を使いこなすことで教員の多忙化の軽減につなげたいという期待もあるだろう（ただし、私見だが、ICT を活用した授業は、従来の授業の

約２倍の準備時間を必要とすると思われる……）。

しかし、上記のことはまだイメージにすぎない。「べきだ」が正しいとしても、取り組むための時間や人的手当てが保証されることが実現の前提となる。

また、各大学の教職課程では、「情報通信技術を活用した教育の理論と方法」に関する新科目をどうやって開設するのか、ICT 機器の操作だけでなく、ICT を使った教育について理論と方法の両面から指導できる教員をどうやって確保するのか、大騒ぎであったろうと想像する。

そんななか、気になるのが、答申の以下の一節である。

> 教職課程の各教科の指導法などの授業において，学生が ICT 活用指導力を確実に身に付けることができるように，教員養成部会においては，例えば，国において作成された，学校におけるICT を活用した学習場面や各教科等の指導におけるICT 活用に係る動画コンテンツを，大学が授業等において活用するよう促している。また，各大学が，例えば，現職の全ての教師に求められる ICT 活用に係る基本的な資質・能力を示した「教員の ICT 活用指導力チェックリスト」等を活用して，大学の個々の授業科目のどの部分でこれらの資質・能力が身に付けられるのかを自主的に検証することを促している。

全国の大学の教職課程で時間的余裕がないなかで、動画コンテンツが創造的な議論の糸口ではなく、唯一のマニュアルとして教条的扱われてしまうようなことにならないか、また形式的なチェックリストだけが一人歩きしてしまうことにならないか、やや心配である。

こうしたことも意識しつつ、勤務先で同僚と知恵を寄せ合いながらこの新科目の準備を進めていきたいと考えている。

＊このコラムでは読者の方からの投稿もお待ちしています。

逸話と世評で綴る女子教育史（83）

―京浜工業地帯・阪神工業地帯と田園都市の創設―

神辺（かんべ） 靖光（やすみつ）（ニューズレター同人）

前号で新聞や雑誌の隆盛が文字文化、識字文化の向上を促し大衆の社会的活動になったことを述べた。新聞も雑誌もその作り手は勿論、その享受者の多くは都会人である。大正から昭和にかけて日本はこれまでにない大都会が現出したのである。その代表は東京府と神奈川県の横浜を結ぶ京浜工業地帯と大阪府と兵庫県の神戸を結ぶ阪神工業地帯である。両地帯とも産業の興隆とともに人口が急増し交通網が拡張すると生活の考え方が変り職と住を分離して快適な暮しを望むようになった。そしてこの両地帯には田園都市という新しい居住地が生まれ、それがまた新しい都市文化を生み出すことになるのである。

現在も活動を続ける京浜工業地帯は東京都全域から神奈川県の殆んどの地域及び埼玉県千葉県の一部にまで及ぶ関東臨海工業地帯とも言うべき巨大な地帯になったがそのはじまりは政府の殖産興業政策による官営工場でその範囲は東京府の西南の臨海地帯から川崎・横浜までの地帯であった。明治の二度の戦争と資本主義の発達で重化学工業の色彩が強い。

江戸城をとりまく山手地域には無数の武家屋敷があったが、明治政府はそこに各種の役所、官舎、学校をつくり、また西洋風の公園をつくった。一方、全国から集ってくる若手官僚や学生、書生のために小規模家屋や下宿屋がつくられ、そこから役所、会社に通う月給取りや学生・書生という新しい風俗がみられるようになった。第１次大戦で戦勝国側についた日本は好景気の波に乗って財力を握り、産業を拡大する。それを狙って全国から技術者や販売人、また労働者が集った。東京府は当初から市内の道路改修に意を注いでいた。鉄道・馬車のほかに民間人による人力車・電車が発達し、大正期になると乗合バスまで登場した。こうなるともはや住居を旧市内（大ざっぱに言えば現山手線以内）に止めて置くこ

とはできない。交通機関の発展にともなって“いっそ住居を郊外につくろう”ということになった。これが田園都市構想である。

田園都市という概念は19世紀末から20世紀はじめに英国で興った。いま時のコトバで言えばbedtownで、夜眠るために帰る住宅町である。大都会の喧騒を避けてできた近郊の小都市をさす。英国の田園都市の構想を早くもキャッチした政府は明治40年に内務省から『田園都市』という冊子を発行した。この田園都市構想を具体化しようとしたのが財界の大御所・渋沢栄一である。彼は若年の頃から都市開発に関心を持ち首都東京については兜町ビジネス街計画や銀座煉瓦街計画などに深く関わっていた。日本列島を縦横に走る国有鉄道はすでに鉄道省の管理に属し、都市と郊外を結ぶ鉄道建設が私鉄の使命であることを熟知していた渋沢は私鉄の開発を計った。郊外の田園地帯を走る私鉄はそれだけでなりたたない。乗客が、つまり大都会に頻繁に足を運ぶ人々が住む街でなければならない。ここに私鉄開発と田園都市計画が結びつく。大正7年、渋沢は三男秀雄を社長とした田園都市株式会社を設立、11年、目黒蒲田電鉄（目蒲線）を同社の電鉄部として12年開通、多摩川台近くの田園調布駅近くを分譲地として売り出した。分譲地は田園調布駅を基点に同心円と放射線に拡がる道路で区画され、公園や広場のスペースもある理想的住宅地がつくられた。住宅地は一区画100坪から500坪、10年間で月賦払いという方法もあった。大正12年9月の関東大震災で京浜一帯は大被害を被ったが田園調布の地が緑豊かで地震に強いことが立証された。以後、田園調布は都心に職場を持つ中産階級の理想の住宅地として発展してゆく。

大正14年には武蔵野鉄道（現西武鉄道）と同系列の箱根土地株式会社が大泉学園、小平（こだいら）、国立（くにたち）などを住宅地に開発し、田園調布式の東京のベッドタウンは私鉄の発展とともに東京の西部郊外に拡大してゆくことになるのである。

阪神工業地帯は京浜工業地帯のように広範囲にわたらないが独特な発達をした。大阪での西洋近代工業の移植は造幣局や砲兵工廠が先鞭をつけたが堺の紡績所から始った紡績会社が発展して明治20年代後半には「東洋のマンチ

ェスター」と呼ばれるようになった。一方、神戸では明治前期にマッチの製造業が盛んになり和田岬の東岸一帯に個人経営や共同経営の工場が林立した。マッチは日本国内及び中国や東南アジアの国々に販路を拡げ、やがて日本のマッチは世界市場に重きをなす。明治19年に和田岬の東南端、大阪湾に向けて川崎兵庫造船所（現川崎重工業神戸工場）が創立され、次いで38年、三菱合資会社三菱造船所（現三菱重工業神戸造船所）、40年、播磨船渠株式会社（現石川島播磨重工業）等が同所につくられた。当然ながら大工場の周辺は部品の下請工場が林立する。かくして京浜工業地帯と並び称される阪神工業地帯ができたのである。

神戸港のすぐ北に三田（さんだ）藩があった。三田藩の最後の藩主・九鬼隆義は明治2年、いち早く版籍奉還して三田県知事となり藩士を帰農させて解散してしまった。九鬼自身は神戸に住んで神戸の土地を買い漁（あさ）り市街整備を始めた。彼は開明派の知識人で福沢諭吉とも親しく神戸港の外国貿易にも一役買っているしアメリカンボードミッションの神戸英和女学校設立に力を尽くしている。彼はまた買い占めた神戸の土地を如何に生かすか努力した。神戸は港のある海岸線に迫ってすぐ北に高くはないが六甲山地がある。よって神戸の街は急峻な坂道でできている。これに適応させて東西に道路を走らせ、南北に坂道をつくり、最上部に外国人の住居、中部は新中産階級の住居地、海岸に続く低地に官庁街と商業地を計画した。その後、この計画通りに事が運び、現在の町並になった。

阪神地域に田園都市が本格化するのは大正期になってからであるが、明治30年代後半からその予兆があった。明治36年に大阪南の茶臼山周辺で第5回内国勧業博覧会が開かれた。従来の勧業博覧会と違って娯楽色の強いもので茶臼山にウォーターシュートが設けられ、サーカスも開かれ、一帯は大遊園地化した。この時、通天閣という塔もたてられた。これらの工事と並行して周囲の道路拡張が行われ、附近のスラム街の住民を移動させ釜ヶ崎に新しい貧民窟がつくられていった。このような状態を大阪の古くからの商人は嫌ったのである。その代表的財閥、住友家は飛田界隈から天王寺駅一帯の卑猥（ひわい）さと陋巷（ろうこう）を憎んで、本

邸を神戸の住吉（当時は閑静な田園地帯）に移した。住友財閥はその後も大阪に本拠を置いて日本の産業開発に活躍するから仕事は大阪、住居は住吉という職住分離の手本を示したことになる。大阪の商人や知識階級の者で神戸郊外に住む者が後を次いだ。

こうなると交通機関としての鉄道と土地の斡旋・売買の需要が高まる。すでに鉄道省管轄の東海道本線が大阪・神戸間を結んでいてこれに平行して走る私鉄を鉄道省が許さなかった。しかし阪神工業地帯の成立と阪神間の田園住宅要求が高まると大阪市と内務省の圧力で東海道本線に併走する私鉄を許さざるを得なくなった。かくして明治39年、大阪梅田と神戸三宮間を結ぶ阪神電気鉄道が開通、不動産業とタイアップして郊外移住を呼びかけた。一方、阪急電鉄は後れて明治43年、大阪梅田と宝塚を結ぶ宝塚線をつくったが大正9年には十三・神戸間を結ぶ神戸線を完成、阪神急行電鉄（略称・阪急電鉄）と改称した。

こうして国鉄東海道線をはさんで阪神・阪急の両私鉄が併走すると、両私鉄は土地販売会社と結んで、或は独自の土地会社をつくり、沿線に田園住宅をどんどん作るようになった。こうして両電鉄の沿線に田園都市が成立したのである。即ち京浜地帯では東京の西部郊外、武蔵・相模の平野に放射線状に田園都市が作られていったのに対し、阪神地帯では主に神戸市の東部郊外に田園都市化が進んだといえよう。そしていずれも東京市、大阪市に生じた中産階級の会社員、自由業者が住人となったのである。田園都市はベッドタウンであるから住民は朝、発達した交通機関で都心に出勤する。東京市、大阪市の産業界は新しい対応をせねばならなくなった。家庭に残された主婦も考える。いくら風景がよいと言っても田園都市のわずかな商店では購買意欲は満たされない。子どもを都心の仕事場に連れてゆくわけにはいかない。学校の問題が起る。このように新しくはじまった田園都市生活につれて新しい諸問題が起るのである。

参考文献　鈴木博之『都市へ』（中央公論新社『日本の近代10』）
吉川弘文館『日本交通史辞典』『日本生活史辞典』

1969年の大東文化大学での学生相談

― 矢田部順吉講師が語るカウンセリング模様 ―

谷本（たにもと） 宗生（むねお）（大東文化大学）

1969（昭和44）年10月、大東文化大学の矢田部順吉講師（心理学）は、自身が大学で担当した、学生相談のカウンセリング模様について、次のように明らかにしている（「カウンセリングとその周辺」）。

事例ケースとして、矢田部講師は次の3つを挙げている。ケース1：男子20歳、ケース2：女子18歳、ケース3：男子18歳、である。

＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊

ケース1　何に対しても自信がない。

相談者　北海道出身。高校卒業後、大学入学のため単身上京する。運動部に入部。3年生の時から、部の幹事役となる。学業成績は概ね良好である。部員からの信頼もあるようである。

面談回数　13回

相談経過　第3回の面談まで中心の問題はぼかされる。自己の問題として、話題が進行することに抵抗感を示した。ようやく第6回ころまでに、問題が明確化され始める。「自分は部員が思っているほど立派ではない。むしろ無能であって、彼らの期待に応えることはできない。自分のなすべきことの責任を考えると、とてもできるようには思えない」と訴えている。第10回ころまでに、カウンセラーが主導権をとって、彼自身の状況の感覚的誤認を追求し、知的な思考を促す。第11回以降、自己洞察の経過を経て、自己に対する感覚的評価が変化し始め、第13回に至り、「どうやらやってゆけそうな気がします。あとは自分で考えてみたいと思います。また問題が起ったら、よろしくお願いします」といって、面談を終了する。

＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊

ケース2　同室の学生が、毎晩友人を連れて来て騒ぐので、落ち着いて勉強ができない。

相談者　山梨県から、高校卒業後に大学入学のため、単身上京する。東京には、伯父おり。学生寮に入り、2人部屋で、同学部異クラスの学生と同居する。学業成績は不良なれども、講義には欠席することはほとんどなく、一生懸命に学習しようとする意欲は強い。友人関係は、ほとんどなく、同室の学生ともあまり話をしないという。

面談回数　5回

相談経過　第2回までかなり未成熟な依存症が認められ、会話も自己中心的な欲求の露呈を中心とし、同室学生に対するやや歪曲された攻撃が表在する。第3回に、環境条件の変更を中心とする助言を行うも、不可能と受け入れず。第4回第5回と、人間関係に対する興味の喚起を促すも、「自分の性格だから」と強固に拒否し、以来相談に来室せず。中断となる。問題は改善されたとは思われない。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

ケース3　おトイレが近く、それが恥ずかしい。

相談者　高知県から、高校卒業後に大学入学のため、単身上京する。下宿生活。高校在学中は、自治会の役員を務める。大学新聞会の役員。学業成績は中の下といったところ。臨床症状より、強迫神経症ではないかと推察される。

面談回数　8回。継続中である。

相談経過　第1回から、症状とそれに伴う不安の訴えが強く、「会議で座っていると、おトイレに行きたくなって困る。とくに行きたくなくても、また直ぐに行きたくなるんじゃないかと思うと、居ても立ってもいられなくなって、ついトイレに行ってしまう。そのことに皆気がついて、何かいわないかと心配である」という。第3回には、「神経科へ行こうかと思うが、何となく怖くて病院へ行けない」といったので、精神医学的見解について教示し、知り合いの神経科宛ての紹介状を渡す。その後3週間、同神経科を訪れなかった。第6回までで、彼の生育歴や環境について共に考え、同時に専門的診察の必要性を指導する。第6回終了後に神経科を訪れ、内科的診察を含む精密検査を行い、中等強迫症の疑いと診断される。本人には、

医学的な配慮から「あまり気にしなくてよい・・」と伝達されている。第7回第8回では、対人関係の場におけるリラクゼーションと、症状への志向性を和らげることを目的として、パーソナリティに対する研究と、彼の興味が何であるかを知るための雑談を主とした指導、助言を行っている。神経科への通院も同時に進めながら、カウンセリングの継続中である。

＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊

大学で学生相談に応じる矢田部講師によると、あくまで「カウンセラーは裁判官ではない」と注意強調している。そして、「カウンセラーは常に冷静にクライアントを受け入れ、クライアントの真の悩みを理解し、彼ら彼女らが不安を持たず、安定した生活が送れるように、指導してゆかねばならない」と、その覚悟と心構えを示している。

まさに時代状勢を振り返ると、高等学校への進学率が1970年代には9割をこえ、高校進学は準義務化の様相を帯びていくのである。また大学（短期大学を含む）への進学率も、高度経済成長の影響を受けて、60年に10.3%（男子14.9、女子5.5）、70年に23.6%（男子29.2、女子17.7）、80年には37.4%（男子41.3、女子33.3）と上昇し、日本の高等教育も欧米先進諸国と並び、大衆化時代を迎えていく、その過程であった。

学校資料の教材化を模索して㉖

ー教員を対象にしたアンケート調査を事例にー

はった ともかず
八田 友和(クラーク記念国際高等学校)

1.はじめに

本稿では、クラーク記念国際高等学校芦屋キャンパス（以下、芦屋校）に所属する教職員を対象に実施した「学校資料に関するアンケート調査」の概要と結果について整理する。芦屋校は、今年度開校30年を迎える比較的新しい学校である。そのような比較的新しい学校には、どのような資料が存在し、教員がどの程度認識しているのかを調べることは、歴史が浅い新設校における学校資料の保存と活用を考えるうえで重要だと考えた。

以上を受け、芦屋校に所属する教職員を対象に試験的にアンケート調査を行ったため、その概要と結果を整理する。

2.アンケート調査の概要

ここでは、アンケート調査の概要について整理を行う。

1.　名　称:「学校資料に関するアンケート調査」

2.　調査対象:芦屋校に在籍する教職員（10名）

3.　実施方法:タブレットに回答画面を表示して実施した。

4.　回収方法:Googleフォームで回収を行った。

5.　実施時期:2021年8月2日～3日に実施

6.　調査趣旨:①芦屋校の教員が、学校内にある資料についてどの程度把握しているかを調査する。

② 今後の芦屋校における学校資料の保存と活用に　ついて考える際の基礎資料とするため。

7.質問項目:4項目

8. 質問内容：(表1)学校資料に関するアンケート調査項目を参照

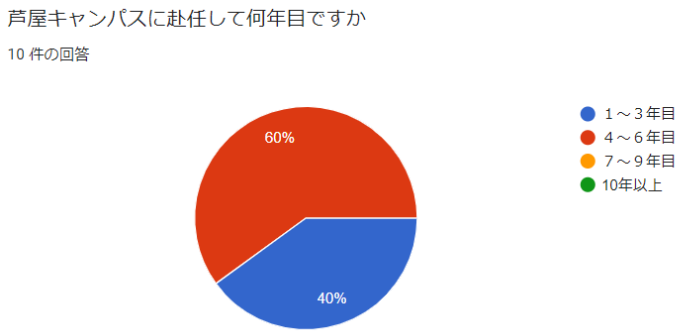
（表1）学校資料に関するアンケート調査項目

No	質問内容
問1	芦屋キャンパスに赴任して何年目ですか
問2	「分類カテゴリー」を見て、学校内でみたことがあるものを直接用紙に全て記入してください。
問3	上記の学校資料を使って、授業をしようと思ったことはありますか。
問4	上記の学校資料を使って、授業をしたことがありますか

（筆者作成）

3. アンケートの集計結果

ここでは、アンケート調査の結果を整理する。



回答者のうち、「4～6年目」と回答した教員が最も多く6名、「1～3年目」の教員が4名であった。もちろん、10年以上勤務している教員も多くいるが、今回は若手を中心に学校資料の存在の有無などの調査を行ったため、このような結果になったと思われる。[1)]

続いて、和崎氏が作成した学校資料の「分類カテゴリー（分類番号）」（資料1）を提示し、見たことがあるものを全て回答してもらった。通知表や賞状、地図などの回答が多いことは予想がついたが、なかには「その他：考古」「教材教具・指導関係：幼児教育」を選択している教員もおり、筆者が把握していない学校資料が存在していることが明らかになった。加えて、問3において、10人中9人の教員が「分類カテゴリー」に記載のある資料を活用しようと思った経験があると回答し、問4においても10人中9人が「分類カテゴリー」に記載のある資料を授業内で活用したことがあるという結果になった。

4. おわりに

本稿では、芦屋校の教職員を対象に試験的に実施した学校資料に関するアンケート調査の概要と結果について整理を行った。本調査からも、比較的歴史が浅い学校にも多くの学校資料が存在する可能性が明らかになった。今回のアンケート調査を踏まえて、「勤務年数が長い教員へのアンケート調査の実施」および「教員への聞き取り調査」も併せて行っていきたいと考えている。

【謝辞】

本稿を執筆するにあたり、芦屋校の教職員の先生方にお世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。

【註】

1）芦屋校には、非常勤講師を含め80名近い教員が在籍している。そのため、全ての教職員にアンケートを取ることが難しく、今回は若手教員のみをアンケート調査の対象者とした。また、多忙な教職員に配慮して、質問項目を4つに抑えて実施している。

【参考文献】

・村野正景・和崎光太郎（編）2019『みんなで活かせる！学校資料』京都市学校歴史博物館

・村野正景ほか2021「学校内歴史資料室についての調査結果と所見－全京都市立小学校を対象としたアンケート調査－」『京都市学校歴史博物館研究紀要』第8号、京都市学校歴史博物館pp.3-18

・和崎光太郎2018「学校歴史資料の目録と分類　補遺」『京都市学校歴史博物館研究紀要』第7号、京都市学校歴史博物館pp.29-34

凡例：前２桁が大分類，後２桁が小分類。便宜上，主に戦後の公称である園児･児童･生徒を「生徒」と総称する。

00　書籍類
0001　学校記念誌・学区誌類
0002　戦後検定教科書
0003　国定期の教科書（1904-1948）
0004　国定期以前の教科書（-1903）
0005　副読本
0006　参考書・問題集
0007　教科別研修資料など
0008　学習指導要領
0009　一般書籍
0010　その他製本されたもの

01　写真・映像
0101　卒業アルバム
0102　記念発行のアルバム・絵葉書など
0103　その他アルバム類
0104　その他写真
0105　映像史料
0106　フィルム・ガラス乾板など

02　文書
0201　学校沿革史
0202　日誌類
0203　建築関係・校舎図面
0204　学校運営関係
0205　学籍簿（指導要録）・指導記録類
0206　地図（学区地図等を含む）
0207　学区関係（青年団・夜学会など含む）
0208　その他文書

03　学校発行物・配布物
0301　学校発行物
0302　通知表
0303　証書・賞状
0304　運動会・発表会・修学旅行関係
0305　その他生徒向け配布物
0306　保護者向け配布物

04　生徒会・同窓会・PTA・部活動
0401　生徒会関係
0402　同窓会関係
0403　PTA 関係
0404 部活動関係

05　生徒作品
0501　作文（文集を含む）
0502　絵画
0503　習字
0504　ノート・プリント
0505　テスト
0506　日記
0507　その他生徒作品

06　教材教具・指導関係
0601　理科
0602　社会
0603　音楽
0604　算数・数学
0605　保健体育
0606　幼児教育
0607　その他教材教具・指導関係

07　建築・鋳造物
0701　瓦
0702　像
0703　その他建築・鋳造物

08　その他
0801　服飾・鞄・靴など
0802　考古
0803　民俗
0804　給食
0805　備品類
0806　手紙類
0807　その他

表２　分類カテゴリー（分類番号）

資料Ⅰ　学校資料の分類表（出典）『京都市学校歴史博物館研究紀要』第7号p.33

明治後期に興った女子の専門学校（38）

東京音楽学校に咲いた天才姉妹―幸田延と安藤幸

長本（ながもと） 裕子（ゆうこ）(ニューズレター同人)

瓜生繁子（うりゅう）にピアノの手ほどきを受けた幸田延（こうだのぶ）は、米欧に音楽留学した最初の日本人ピアニスト。八つ年下の妹幸（こう）も東京音楽学校に学んだ最初の日本人ヴァイオリニストである。姉妹で東京音楽学校教授を務め、後進の指導にあたった。

延は明治3年3月、東京下谷の中御徒町で、父幸田成延（しげのぶ）、母猷（ゆう）の8人兄弟の長女として生まれた。幸は、11年12月、次女として生まれた。幸田家は代々徳川家に仕えた武家であったが、微禄だった。維新後、父は大蔵省の下級属官となった。兄は後の作家幸田露伴（ろはん）である。

延は幼少の頃から、母の手ほどきで長唄を、琴を山勢松韻に習い始める。6歳、東京女子師範学校付属小学校（現お茶の水女子大学付属小学校）に入学した。15年、唱歌を教えに来たルーサー・ホワイティング・メーソンの勧めで音楽取調掛の伝習生となった。音楽取調掛長は伊沢修（いさわ）二、ピアノはメーソン・中村専・瓜生繁子、歌唱は上真行（うえさねみち）、ヴァイオリンは多久随（おおのひさより）から学んだ。18年7月、幸田延（16歳）、遠山甲子（きね）（19歳）、市川道（17歳）の3名が全科修了し、音楽取調所（18年2月改称、同年12月には再び音楽取調掛に戻る）第1回の卒業式が挙行された。卒業演奏で延は、瓜生繁子が選んだピアノ曲ウエーバーの「舞踏会への招待」を独奏し、遠山や市川とヴァイオリン三重奏を披露した。延は研究科に進み、月給8円で助手を命じられた。

20年10月、東京音楽学校と名称も改まり、音楽の専門家を養成する教育機関として独立した。21年11月、オーストリア人でオルガンの専門家であり、ピアノ、ヴァイオリン、管弦楽法にも熟達していたルドルフ・ディートリッヒが来日した。延はこのディートリッヒに才能を認められ、ヴァイオリンを習った。ディートリッヒは延

のレッスンに同校した10歳の妹幸の手を見て、“この子はヴァイオリニストにすると良い。”と言った。ヴァイオリニスト安藤幸が誕生するきっかけとなった。幸も3歳から日本舞踊を、5歳から琴を山勢松韻に習っており、音楽の素養があった。

留学した頃の幸田延（萩谷喜子著『幸田姉妹』）

1889（明治22）年4月、19歳の延は、第1回文部省音楽留学生としてアメリカへ留学。ボストンにあるニューイングランド音楽院でヴァイオリンやピアノを学んだ。1年後一旦帰国し、1890（明治23）年、オーストリアへ向かった。ウィーン音楽院に入学して、ヴァイオリンを専攻し、院長の息子であるヨーゼフ・ヘルメスベルガーニ世に習う。ピアノはフレデリック・ジンガーに、和声学をロバート・フックスに学んだ。ウィーンの5年間は熱心に勉強し、履修した教科はすべて「優」だった。ウィーンの大きな書店の夫人で芸術家を保護するローザ・フォン・ゲルグから、アマティのヴァイオリンを贈られた。

日本では、延が不在中にもかかわらず、24年4月の『音楽雑誌』第19号に載った「婦人和洋音楽家人気投票」の西洋音楽家の部で、延は307票を獲得し、第1位。第2位は288票でピアノの恩師瓜生繁子だった。28年11月、5年間の留学を終えて帰国。東京音楽学校の教授に就任し、ヴァイオリンを教えた。妹幸も生徒として延の指導を受けている。29年4月、帰朝記念演奏会では、ヴァイオリン独奏、ドイツ語での独唱、弦楽四重奏の第一ヴァイオリンを演奏するなど多才ぶりを発揮した。

26年、帝国大学文科大学の哲学科教授として来日したロシア人ケーベル博士が、31年から東京音楽学校講師となった。ケーベル博士のピアノはチャイコフスキーなどに学んだ本格的なものであった。そのケーベル博士が渡辺龍聖校長に「幸田をピアノの先生に」と言った。ヴァイオリンは妹の幸にゆだねることにし、延はピアノ科教授になった。作曲の滝廉太郎、声楽の柴田環（後の三浦環）、ベ

ートーベンの演奏者として評価が高かったピアノの久野久子らそうそうたる音楽家を育てた。日本人として初めて洋楽を体系的に学んだ延は、ピアノ、ヴァイオリン、声楽を教え、作曲家としても活躍し、それまでの外国人教師主導の時代から日本人教師主導の時代を築いていった。明治39年2月15日付新聞『日本』は、日本で最も所得のある女性として、宮中御用掛、華族女学校学監、実践女学校長の下田歌子（年収5,000円）に次いで幸田延（年収2,300円）を紹介している。

ところが、41年ごろから、延に対してジャーナリズムのバッシングが始まった。東京音楽学校では、延を筆頭に安藤幸（旧姓幸田幸）、橘糸重、神戸絢子（こうべあやこ）、杉浦チカら女性教師の活躍がめざましかった。オルガンの名手といわれた島崎赤太郎を中心とする男性教師グループとの反目が取りざたされるようになった。萩谷喜子著『幸田姉妹』によりその顛末を概略しよう。

41年9月1日、大衆紙『やまと新聞』が、「男女学校評論」というコラムを載せた。その東京音楽学校の項に、“……幸田延子女子は芸術家として尊敬すべき天才を有している。しかし教育家としての品性人格は絶対に否認せざるを得ない。……女史が退けば、本校否我音楽界が如何に発展するかは言を俟たずして明である……”。

この2週間後、『東京朝日新聞』が5回にわたって「憂うべき音楽界」と題した記事を掲載した。“……ああこの大芸術を婦女子の手にのみ委（まか）して、男子拱手傍観（きょうしゅぼうかん）して沈黙すると云うは由々しき国辱にあらずや。……” “……此の人（筆者注　ユンケルのこと）の幸田女史との関係云々梅毒云々は別問題として……”などのような低俗で悪質な記事を掲載した。

42年、雑誌『帝国文学』に延に対する長文の批判記事が掲載された。男性音楽家不振を嘆く世間の風潮が、「上野の女王」と称されて、女性音楽教師の筆頭である延を音楽学校から引かせようという意図が丸見えだった。さらに42年春から夏にかけて、教え子の藤井環（後の三浦環）が世間を騒がせた

不倫事件も延に追い打ちをかけた。延は非常に傷つき、自ら辞表を提出せざるをえない状況に追い込まれた。42年9月、延は14年間教授として勤めた音楽学校を去り、再びヨーロッパへ向かった。

43年8月、帰国した延は、赤坂紀尾井町の自宅でピアノの個人教授所を創立し家庭音楽の普及を目指した。後に敷地内に40畳ほどの「洋洋楽堂」を建て、来日した音楽家を招いて音楽会を開き、民間音楽外交の役割を担った。昭和12年、67歳の延は洋楽関係者として、また、女性として初めて、兄幸田露伴とともに帝国芸術院会員に選ばれた。21年6月、心臓病のために永眠した。享年76歳。

妹の幸は、ヴァイオリンを専攻し、明治29年に東京音楽学校本科を卒業。成績優秀で特待生として授業料を免除された。28年帰国し教授となった姉延に師事した。3年間の研究科修了後、32年6月ドイツへ留学。ベルリン高等音楽学校でヴァイオリン界の巨匠ヨーゼフ・ヨアヒムから教えを受けた。36年帰国し、25歳で東京音楽学校教授となった。学内オーケストラのコンサート・ミストレスも務めた。38年27歳で英文学者の安藤勝一郎と結婚し、4男2女（1女は夭折）を育てながら、昭和7年、東京音楽学校教授を依願免官となるまで29年間活躍した。同年6月に開かれた第1回ウィーン国際コンクールの審査員に日本人として初めて招かれた。帰国後は再び東京音楽学校の講師を務め、昭和17年3月まで多くの音楽家を育てた。同年11月、芸術院会員に推薦され、33年女性として初めて文化功労者に選ばれた。38年4月、くも膜下出血のため永眠した。享年84歳。

留学時代の幸田幸（萩谷喜子著『幸田姉妹』）

作家幸田露伴、ピアニスト幸田延、ヴァイオリニスト安藤幸の兄妹3名がそろって芸術院会員になった。まことに稀有な才能揃いの兄妹である。

参考文献

『創立五十年記念』東京音楽学校

『東京芸術大学百年史』東京音楽学校篇第一巻

萩谷喜子『幸田姉妹』洋学黎明期を支えた幸田延と安藤幸

幸田延「私の半生」（『音楽世界』昭和6年6月号）

新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究に関する覚書（8）：鳥取東高等学校『柏葉』にみる専攻科（8）

吉野（よしの） 剛弘（たけひろ）（埼玉学園大学）

今号では、引き続き鳥取東高等学校より刊行されている『柏葉』に掲載された専攻科の教育課程に関する情報を検討する。今号では鳥取東高等学校専攻科に導入された大手予備校の衛星講座を対象とする。

『柏葉』に掲載されている大手予備校の衛星講座に関する情報は、1997（平成 9）年度から 2000（平成 12）年度までの間のみである。ただし、これはあくまで『柏葉』に掲載された時期であって、始期、終期のそれぞれが実際の始期、終期と一致しているとは限らない。

大手予備校の衛星講座の導入時期は下記の通りである。それゆえ、1997（平成 9）年度より前に導入されていたとしても、1988（昭和 63）年度以降ということになる。

1988（昭和 63）年 河合塾、サテライト講座開始
1989（平成 1）年 代々木ゼミナール、サテライン開始（冬期講習より）
1991（平成 3）年 東進ハイスクール、サテライブ開始
1993（平成 5）年 駿台予備学校、サテネット開始

『柏葉』に掲載されている年間スケジュールを見ると、1997（平成 9）年度から「夏期補講」「冬期補講」というものが入り始める。冬期補講は 2003（平成 15）年度まで、「夏期補講」は最終年度である 2008（平成 20）年度まで掲載され続ける。掲載され始めた時期は衛星講座の導入と一致して

いるので、補講は衛星講座のことを指しているようにも思えるが、これが衛星講座のみを指しているのか、あるいは対面型の授業など他のもの含んでいるのかは不明である。

大手予備校の衛星講座を導入するということは、大学入試への対応という点では、入学希望者のニーズに対応した事例ということができる。一方で、山陰地方には１校もない大手予備校の授業の生中継を見せるということは、専攻科にとってリスクにもなりうる。「都市の栄華」を目の当たりにさせることで、都市部の大手予備校への流出を招きかねないからである。それでも導入されたということは、大学入試への対応という側面が勝ったということであろう。

紙幅の関係で、詳細な検討は次号以降に回し、今号では『柏葉』に掲載された情報の全体像のみを示す。本論末尾の表にまとめたものが掲載された情報の全てになる。

表を見ると、鳥取東高等学校が利用したのは、代々木ゼミナールと河合塾の衛星講座だったことが分かる。他の二つの予備校を利用しなかった理由は、高等学校側の議論を見なければ分からない。また、予備校側が外部へのコンテンツ販売にどれほど熱心だったかという営業戦略も関わってくる。

1997（平成９）年度と１998（平成１0）年度以降では掲載される情報が異なっている。講師名や受講者の内訳は最初の１年分しか示されていない。

しかし、予備校側の情報はパンフレットで補うことが可能である。次号以降では、いくつかの情報を補充した上で検討していく。

年・期	予備校	講座名	講師	人数			
				A	B	現役	計
1997	代ゼミ	センター試験英語	佐藤	42	16	2	60
(平成9)		センター試験物理ＩＢ	鈴木		28		28
夏期		センター試験化学ＩＢ	亀田	16	18	2	36
		センター試験生物ＩＢ	中島	33	3		36
		センター試験日本史B	八柏	17	3		20
		センター試験世界史B	森本	17	13	2	32
		センター試験地理B	武井	19	12		31
		ハイレベル英文読解	富田	19	7	9	35
		東大文系数学	岡本	4		5	9
		理系数学	雨宮		25		25
		理系数学	萩野		19	5	24
		計		167	144	25	336
1997	河合	センター試験対策英語	里中	51	28		79
(平成9)		センター試験対策数学	渡辺	45	29		74
冬期		センター試験対策国語	石原／鈴木／秋野	50	23		73
	代ゼミ	基礎完成物理（力学／熱／波動）	鈴木		20	5	25
		センター試験化学ＩＢ	亀田	17	9	5	31
		センター試験生物ＩＢ	中島	28	2	20	50
		センター試験私大マーク日本史B	伊達	11	4	10	25
		センター試験私大マーク世界史B	森本	15	9	12	36
		センター試験私大マーク地理B	武井	18	6	9	33
		センター試験政経	小泉	5	2	1	8
		計		240	132	62	434
1998	河合	最頻出英文法					41
(平成10)		センター数学ＩＡ・ⅡＢ					31
夏期		二次・私大数学ＩＡ・ⅡＢ					34
		基礎完成物理（波動／電気）					22
		センター試験生物ＩＢ					30
		近現代世界史					20
		近代日本史					18
		計					196
	代ゼミ	ベイシック英語*					17
		センター英語*					32
		英語上級レベル養成					17
		超重要数学ＩＡ・ⅡＢ*					29
		基礎→応用古文*					31
		基礎化学（有機）*					7
		センター化学ＩＢ					11
		センター地理					21
		計					165

【凡例】

1998（平成 10）年夏期の※は現役生と合同であることを示す。

年・期	予備校	講座名	講師	人数			
				A	B	現役	計
1998		英語総合読解（難関入試）					19
(平成10)		頻出テーマ現代世界史					16
冬期	河合	頻出テーマ日本史					9
		センター対策地理B					20
		センター対策化学ＩＢ					18
		センター対策生物ＩＢ					31
	代ゼミ	センター試験物理					17
		センター試験政治・経済					8
		計					138
		センター英語					40
		センター数学					36
	河合	入試頻出物理					13
		入試頻出化学					4
		計					93
1999		最頻出英文法・構文・イディオム					67
(平成11)		基礎力完成物理（波動／電気）					63
夏期		基礎力完成無機化学					51
	河合	センター試験対策生物ＩＢ					47
		最頻目で見る日本文化史					25
		最頻目で見る世界文化史					21
		計					
		センター数学					32
		基礎～数ⅢC					20
	代ゼミ	センター現代文					23
		東大地理					4
		計					
1999		センター対策数学ＩＡ・ⅡＢ					29
(平成11)	河合	頻出テーマ近現代日本史					17
冬期		センター試験対策地理B					19
		計					
		センター試験・私大マーク世界史					26
	代ゼミ	センター試験物理ＩＢ					29
		センター試験生物ＩＢ					27
		計					
2000		入試頻出英語総整理					35
(平成12)	河合	センター試験対策数学ＩＡ・ⅡＢ					32
夏期		センター試験対策生物ＩＢ					21
		計					
		国公立大学英語SPECIAL					35
		数ⅢC解法の戦略					13
	代ゼミ	源氏物語特講					19
		センター物理ＩＢ					11
		センター化学ＩＢ					11
		計					
2000		センター試験対策数学ＩＢ（ママ）					27
(平成12)	河合	頻出テーマ現代世界史					18
冬期		センター試験対策地理ＩＢ（ママ）					16
		計					
		センター試験物理ＩＢ					3
		センター試験化学ＩＢ					11
		センター試験生物ＩＢ					8
	代ゼミ	センター試験・私大マーク世界史					7
		センター試験政経					5
		計					

体験的文献紹介(31)

―明治初期 東京の私立中学校、私立外国語学校調査―

神辺(かんべ) 靖光(やすみつ)(ニューズレター同人)

明治6年4月、文部省は「学制二編」を発して新たに専門学校と外国語学校を加えた。「学制」が示す大学はすぐにつくれるものではない。しかし西洋の科学技術をとり入れて文明開化の実を示さねばならなかった。そこで西洋人の教師を雇い、日本人の洋学者も加えて速成の官立専門学校をつくった。開成学校である。開成学校の教師は殆んど西洋人であるから生徒は外国語が理解できなければならない。よって文部省は各大学区本部に官立外国語学校をつくった。外国人教師は英米人がドイツ人、フランス人だというので英独仏の諸学科としたが、開校してみると三語学科は実施できず、生徒も英語科に集まるので東京以外はみな官立英語学校になった。私立の英語学校は東京や横浜、大阪等にできていた。これらも公認したので明治7年の『文部省第二年報』以後の「外国語学校表」に私立外国語学校が多く載るようになった。こうしてわが国の中等教育は明治7年頃から開成学校への進学をめざす外国語学校・英語学校と漢学塾とかわらない中学校の二系統になったのである。

さて私自身の研究である。『文部省第二年報』から『第八年報』に日本中の中学校と外国語学校の動向を詳細に示す一覧表が掲載されていることがわかった。中学校総数1,123校、外国語学校177校である。この大多数の学校のどこから手をつければよいだろうか。数年前、私学史研究をした時、私はまず東京所在の私塾に的をしぼった事を想い出す。東京都公文書館(当時は都政史料館)の文書の写しも持っている。そこで当面、私立中学校も私立外国語学校も東京所在に限って調査研究することにした。

『文部省年報』収載の東京の私立中学校数は473校、私立外国語学校は117校、決して生やさしい数ではない。しかしやらねばならない。私は『文部省第

二年報』～『第八年報』収載の「中学校表」「外国語諸学校表」全部をコピーする作業から開始した。

ここで横道に逸(そ)れるが、コピー機器の恩恵についてふれておきたい。コピー機の発明については全く知らない。私がコピー機に接したのは昭和41年、東京立正女子短大に就任した時である。そのコピー機は二度刷りで不鮮明であったが、度重なる改良で忽ち効率がよくなった。同時に就任した日本私学教育研究所でも高質のコピー機があって喜んだ。丁度教育史研究に没頭した時なので、私のように史料を鉛筆で書き写す者にとって有難い存在であった。

さて私は教務部事務所備え付けのコピー機を使ってかなりの量の「中学校表」「外国語学校表」をコピーした。これらの学校表は学校名称、学校所在地名、官公私立の別、学校設立年、主宰者、教員数、男女別生徒数等が書かれている。一見、無機質なペーパー資料のように見えるが他の資料とつき合わせて考えると生き生きした学校像が浮かんでくる。例えば学校名称である。〇〇塾とか〇〇堂などとあるのは旧来からの漢学塾である。慶応義塾のように〇〇義塾とか〇〇義黌とあるのは数人の義援金(ぎえんきん)によってたった私塾である。〇〇女塾とか女黌というのは草創期の女学校である。中学校の一種と考えられていた。〇〇夜黌とか夜学校という校名もあるから夜間授業も行われていたのである。東京府以外の、例えば大阪府では〇〇医校、〇〇医黌という名の中学校もある。河内、和泉の地に蘭方医が集っていて医師を養成していたが、それらを大阪府は中学校の一つとみなしたのである。教員数も東京府の中学校は一人が多い。これは漢学塾の塾主で近世以来の高名な儒者である。しかし外国語学校は慶応義塾の教員15名を筆頭に共立学校、同人社、共憤義塾等数人から10人ほどの教員を抱え込んでいる私学もある。これらの私学は東京に残った旧大名の屋敷に拠て旧大名の援助を受けた私学なのである。生徒数も慶応義塾の448名、攻玉塾の225名で、7、8名の漢学塾と大差があった。

東京府所在の私立中学校、外国語学校の実態を浮かび上らせることが目的である。『文部省年報』所載の「学校表」を分析すればある程度わかると思った

が、創設者の活動がわからない。よって早稲田大学の図書館と神田の古書店街で当時の国漢洋学者の伝記及び学校沿革史を探し、あるものは借り出し、あるものは買い求めた。これらの中で竹林貫一の『漢学者伝記集成』、小川貫道『漢学者伝記及著述集覧』は有効であった。洋学者の伝記集成は見当らなかったが、慶応義塾をはじめ攻玉社、共立学校等は学校沿革史ができていたので、これらを借り出したり買い求めたりして漢学塾系の私立中学校も洋学系の私立外国語学校も開学の明治7、8年までの状況が大体わかった。

江戸で高名な儒者・安井息軒は天保12(1840)年から麹町で三計塾という漢学塾を開いていた。息軒は日向飫肥〔日向の読み ひゆが → ひゅうが ?〕藩士であるが"、若い頃、江戸へ出て昌平黌に入り、成績優秀であったから昌平黌の教授になった。明治になって職を解かれたが自分の私塾三計塾で教えていたところ明治8年から三計塾が私立中学校に指定されたのである。島田重礼も昌平黌の教授であった。明治維新後、下谷練併町に双桂精舎という漢学塾を開いたので明治8年からこれが私立中学校になった。仙台藩士の岡千仞も若くして昌平黌で学び書生寮長をしていたが戊辰戦争で仙台に帰った。明治2年、東京に戻り、芝愛宕下に綏猷堂という漢学塾を開いた。明治8年から私立中学校になる。このように昌平黌の教官出身者が開いた漢学塾が私立中学校になった例がかなりあるが、例外もある。芳野金陵も昌平黌儒官であり、神田に彼の漢学塾があったが、私立中学校にはならなかった。漢詩人の鱸松塘は浅草に七曲吟社を開いていたが、これは明治8年から私立中学校になっている。しかし同じ漢詩人・大沼枕山が下谷御徒町に開いた下谷吟社は7年以後、私立小学校になったり私立中学校になったり年々かわっている。これは学校表に書きあげる町役人が判断できなかったのであろう。こうした私立中学校の中で明治4年10月、浅草の東本願寺境内にはじまった真宗東派学塾は異色である。国学漢学を主に教えるが仏教学や英学も教えると言う。校長は東本願寺の大谷光勝で、教員には本願寺の僧侶と元幕臣・成島柳北の弟子らしき士族の名があがっている。

成島は明治になってから本願寺の大谷一族と一緒にロンドンに遊学した開明派で当時朝野新聞の社長である。私立中学校の中で注目される学校であった。

私立外国語学校になった第1は幕末にはじまった洋学塾である。福沢諭吉の慶応義塾や近藤真琴の攻玉塾などで、明治4年の東京に洋学ブームを巻き起こした。次に廃藩置県で東京在住の旧藩主たちが一たん帰国したので空いた旧藩邸につくられた外国語学校である。旧南部藩主・南部信民名儀の共憤義塾、旧常陸下館藩主・石川総管名儀の勧学義塾等8校を数える。校主の旧大名は名儀だけのものもあるが、勧学義塾の石川総管などは東京に残って陣頭指揮で学校経営につとめた。これらの学校は外国人の教師を雇い、門戸を開いて自藩の士族だけでなく広く学生を集めた。第3に「学制」公布直前の臨時措置としてつくられた学校である。例えば大学南校は大学がなくなったので南校に改めたがその際、正則課程だけにしたので変則生の行き場がなくなった。そこで文部省勤務の辻新次以下の官僚が文部省敷地内のある家に共学舎という英語・仏語・数学の私立外国語学校をつくった。同様なものが訓蒙学社、逢坂学校、育英学校等数校ある。第4にキリスト教プロテスタントの英語学校がある。プロテスタントの英語学校は明治の始めから筑地の外国人居留地で活動していたが、居留地は当時、大蔵省の管轄であったから『文部省年報』には記載されなかった。しかし明治8年以降、東京在住の日本人を名儀人として外国人牧師が教える外国語学校が東京市街にできたのである。例えば明治8年、神田錦町にできた古川正雄の英語学校で実はメリジスト派のJ.ソーバーの塾であったが、後に青山学院に吸収される。同様に島田乙丸が中六番町に開いた乙亥学舎は聖公会系で後に立教大学につながる。このような例もまだいくつかあるが『文部省年報』所収の「外国語学校表」に登載されているのである。これらは明治9年まで『〔「 ?〕外国語学校表』〔〕 ?〕に記載されるが10年になると一せいに「中学校表」に移される。この年、経費不足のため官立英語学校が閉鎖され、在地の府県立中学校に変えたからそれにならって東京府は私立外国語学校を私立中学校のに変更したのである。この間の経緯を「私立外国語学校の開業と継続状

況について」と題して論文を書いた。たまたま日本私学教育研究所から同所発行の「調査資料」に論文を載せるように言われたので、これに応じた。「明治初年における東京の私立中学校1 ―漢学塾系私立中学校―」(調査資料12・教育制度等の研究3 昭和47年3月刊)、「明治初年における東京の私立中学校2―私立外国語学校の開業と継続状況について―」(調査資料19・教育制度等の研究4 昭和48年3月」に掲載されている。

参考文献

『文部省第二年報』～同『第八年報』
『明治以降教育制度発達史第1巻』
竹林貫一『漢学者伝記集成』
小川貫道『漢学者伝記及著述集覧』
『慶応義塾百年史上巻』
『攻玉社百年史』

『月刊ニューズレター　現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
刊行要項（2015年6月15日現在）

1.（目的）広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。

2.（記事のテーマ）記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。

3.（刊行頻度・期間）研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。

4.（編集委員会・編集世話人）発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は冨岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。

5.（執筆者）執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。

6.（記事の責任）記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせることがあります。

7.（記事の種類・分量）記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。

8. 毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少部数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。

9. ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。
http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/

10. ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。

11. 以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

短評・文献紹介

莇昭三さん（城北病院名誉院長）が執筆された、15年戦争中の政府の「科学動員」政策と「官立金沢医科大学」（『戦争・731と大学・医科大学』2016年、所収）を拝読しました。なかでも、1944（昭和19）年度の科学研究費に関して、金沢医科大学の教授会でも、戦力増強にかかわる研究として、航空医学（15000m以上滞空時における疲労対策）、潜水艦医学、マラリアに対する特殊薬、輸血代用の研究、凍傷の対策、発疹チフス、熱帯寒地の栄養などが強調され、戦争協力の研究がいっそうはかられたのだといいます。しかし、莇さんの見解では、医学の研究課題は全体的にみると、他の理学、工学部門の研究課題のような「決戦体制」にはなっていなかったようだと推察しています。この点、さらなる慎重な事例分析を重ね、吟味検討していく必要があるのでしょう。（谷本）

会員消息

新聞記事（東京新聞2021年10月8日、3面）などで私は知りましたが、名古屋医専の教員も務めながら、JR名古屋駅前に歯科衛生士の学習・復職などを支援する研修施設シリウスを開設している代表でもあるという、伊藤直美さん。自身も歯科衛生士である伊藤さんによれば、「歯科衛生士は大半が女性で、結婚や出産を機に離職する人が目立つ。夜間や休日も診療する施設も多く、労働環境は厳しい」といいます。そんな伊藤さんの思いとしては、「長く働けて、復職しやすい。そんな理解ある歯科衛生の医院を1つでも増やしたい」とのことです。とても素晴らしい志だと感じました。

ちょうどそんな折り、このNL同人でもある神辺靖光さん・長本裕子さんらが記された『花ひらく女学校　女子教育史散策・明治後期編』（成文堂、2021年）が刊行されました。神辺靖光『女学校の誕生　女子教育史散策・明治前期編』（梓出版社、2019年）の続編にあたります。明治後期編の本書では、女学校から高等女学校へ、さらに高等教育としての専門学校が、陸続と勃興する女子教育史の展開を詳述しています。皆さんも、ぜひ手にとってご覧になっていただければ幸いです。（谷本）

2021年10月16日～24日に、日本教材学会第32回研究発表大会が紙上研究発表大会として開催された。筆者は、「遺物から時代の特色を理解する学習の意義と方法」というテーマで、口頭発表の部にエントリーを行った。事前に発表要旨を提出し、『研究発表

要旨集』として会員に公開が行われ、その発表原稿に対して、メールでの質疑応答が行われた。

次年度（2022年度）も、ZOOMによるオンライン大会として実施される見込み…早く対面による大会になれば良いのにな…と願っています。（八田）

保育系の大学に勤務する教員は、この時期、実習の巡回指導で大忙しです。学生もたいへんですが、こちら教員もいろいろたいへんです…。先日は、静岡県の幼稚園に行ってきました。秋晴れの富士山を見ながら、思えば遠くへ来たもんだ～と、ロずさんで幼稚園に向かいました。（山本剛）

本号では、多忙のため、連載記事と「短評・文献紹介」の両方を書けませんでした。大変残念です。年末に向けて、多忙ななかでも、このニューズレターを使って少しずつ計画的に研究活動を進めていきたいと思います。少しずつ時間を作って投稿することを、みなさんと一緒に何とか続けたいと思います。（冨岡）